

ある出版人の行路

——文潮社と池澤丈雄

掛 野 剛 史

一、はじめに

手元にある一冊の本を出発点に稿を起こしたい。といっても特別な稀覯本といった類のものではない。その気になれば誰でも入手できる本である。池澤伸介『文豪のおごり』（大陸書房、一九八三年七月）がそれである。いつ手に入れたか覚えがないが、神保町の古書即売会で入手したことは間違いない。この本は一言でいえば出版人の回想記にあたる本だが、何ともいえない妙な本なのである。まず版元が今は亡き大陸書房である点。オカルト系の本を多く出していた大陸書房からはおよそ似つかわしくない類の本である。そしてまた著者の池澤伸介という名に聞き覚えがない点。もっとも、著者略歴といった類のものはないものの、本文を読み進めていけば、この池澤伸介なる人物

は、戦後に文潮社という出版社を興した池澤丈雄と同一人物なのだとわかる。それでは「池澤伸介」名義はペンネームなのか、だとすると、いつから名乗っているのかなど、これもまた不明である。そしてさらに読み進めていけば、「文豪のおごり」なるタイトルが、とても全体を統括する題として、およそふさわしくない点にもひっかかりを覚えることになる。「文豪のおごり」というタイトルに関わる内容の記述は「谷崎潤一郎氏の非礼」と書かれた一節しかないのだが、なぜかこれが全体のタイトルになつていて、およそバランスを欠いている。

「戦後の文壇を活写し自らも出版人として作者の裏面を数かず体験した、あるピエロの独白」とカバ―に書かれてあるこの本は、内容からいえば、戦後に一つのブームを起こした文潮社と池澤丈雄をめぐる戦後出版界の回想記として貴重な証言を残

す書物なのだが、そうした内容以上に一種の奇妙さを含んだ書物である。この奇妙な感覚をいだいたまま、次章以降の記述を進めることにする。

二、新潮社創業まで

そもそも池澤丈雄はどういう人物で、彼が興した新潮社という出版社はどういう出版社なのか。そのアウトラインを述べておきたい。彼の最初の著書は『創作と随筆』という題で自費出版したもののだが、池澤自身の手による「跋文」で、その内容について説明されている。それによれば、

巻中に収めたのは主として昭和八年頃から十二年頃迄に、私のやつて居る雑誌「笛」^①其の他の他三四種の雑誌に掲載したものゝを蒐めたもので、尤も此れは決して其の全部ではなく、割合に自分の氣に入つたものゝ文を纏めたものである^②。

のだという。『笛』という雑誌は確認できていないが、「他三四種の雑誌に掲載したもの」とされ、創作として収録されている七篇のうち、「そば侍」「峠の茶屋（雑誌掲載時は「峠の家」）」という小説は、大阪で出していた『食通』という雑誌に掲載したものである。この雑誌には江戸時代に材をとった大衆小説「怪異南蛮亭始末」（全十回）を連載したりしているが、この時、池澤は大阪高島屋に勤務しており、その関係で『食通』とつな

がりが出来たものと思われる。

これに続けて自らの来歴を書き記しているが、その記述やその他の情報をあわせて跡付けると、一九一〇年洲本市出身、洲本中学一年の時に講談社の『現代』に童話を投書し当選、二年の時に同人雑誌をはじめ、四年の時には『サンデー毎日』の第二回大衆文芸に佳作が入選し、日本大学に入学後は学生で文芸雑誌を作るなど文学青年として成長。現在は大阪高島屋に勤めながら『笛』『新潮』という同人雑誌を主宰しているということになる。

彼はその後、わかもと製菓の広告部に勤め、その後日配に勤めるが、ここで返本の現場を目撃したことが転機となった。

そんなある日、私は社内の返本処理現場を覗いてびっくりした。荒縄でしばった数百、数千冊もの書店からの返本の束が無造作にトラックから投げおろされ、厚表紙が剥がれてこわれている本もあった。もちろんすべて新本である。全国の書店から売れ残りの本がここに集められ、それぞれが出版社に送り返す作業をしていたのだが、それにしても数が多すぎた。これらの売れ残り本が本当に価値のない役立たずの不要本なのだろうか？ と私はそれを見ながら考えた。（略）

私は、何とかして一冊も返本されないようなすばらしい本を出したい、とそのとき思ったものである。（一四）

「一冊も返本されないようなすばらしい本」を世に送り出すという出版への希望がこの時芽生えた。この後、池澤は創造社に入り、雑誌『創造』の編集長を務める。『創造』一九四四年一〇月号の編輯後記に「池」とあるのが彼のことだろう。そして戦後も引き続き編集長の地位にあったが、この時に水上勉とのつながりができる。

『秋風記』は、新人の力作である。文壇は勿論、如何なるデヤーナリズムの上に於ても、老廃の旧人依然として跋扈し、新生の色一向に見えぬ只今、新人の擡頭と、その起用をこそ我々は待望し、敢てこの一篇を贈る所以のものなり。

ここで贅辞を贈る「秋風記」が水上の作品で、のちに「巷風」と改題し、新潮社から出る水上の『風部落』という単行本に収録される作品である。ただ編輯後記に名前があるのは、ここまでは、その後、創造社の社長と感情の行き違いがあり、独立に気持ち傾いていた時期、親しい日配関係者と話すことがあり、独立して出版社を興すことになったのであった。

『文豪のおこり』によれば、まず配本については、日配関係者の好意で、返本がないという条件をかちとり、企画についても関係者の伝手をたよって山本有三の「風」、これは戦前は検

閲による改訂版が出ていたものだが、これを復元した単行本を出せることになる。さらに紙についても創造社時代の関係から目途が立ち、印刷、製本についても準備が整うという万全の体制で出発することができるようになったのだという。こうして池澤丈雄は新潮社を創業した。

三、新潮社創業

新潮社の最初の刊行物は山本有三の『風』だが、それについて、おそらく最も早い新聞広告が一九四六年五月二七日の『読売新聞』に掲載され、同じ版下を使った広告が、遅れて『毎日新聞』、『朝日新聞』に掲載されている。広告中には六月中旬とあるが、実際の刊行は遅れたようであり、『風』は九月に刊行されることになった。

この時刊行された本の巻末に「新潮社の出版について」という、創刊の辞にあたるような文章が池澤丈雄の署名で掲載されており、一九四八年九月刊行までの約二年間は掲載され続けていることが確認できた。その全文を引用してみよう。

太平洋戦争で、私共は、数多いいろ／＼なものを失ひました。失ふべくして失つた輪廻（りんね）を考へると、いきどほりや、悲しさや、淋しさなどの凡情から解脱（げだつ）する事は、さして困難なことではありませぬ。しかし、どうしても愛惜（あいせき）に堪へないのは、貴重な文化

財の多くを失つた事についてであります。文学のほんの隅つこの方ではありますが、それに携はつてゐた私共は、本當に微力なのですが、これまでの名作文学の復元と、更に進んで新しい文化国日本の理念にそつた文学運動を起すために、非力を集めて本社をつくり、出発したのです。抱負や数々のプランの多いのには、我ながら呆れますが、たとへ少しぐらゐのモーションは遅くとも、その一つ一つに心をこめて、確實にこれから永い将来への仕事を続けて行きたいと思ひます。「名作現代文学」は、その中の第一着手であつて、いろ／＼な点でも良心的な出版といふことでは、他にひけを取らない自信を持つてゐます。出版といふ仕事を単に事業的野心だけで行ふ事は、私共が最も忌みきらふことであつてよい本をつくるといふ事が全目的でなくてはなりません。そうすれば事業としても自然に成功するのだと思ひます。どうか皆さんのご支援をお願いいたします。

昭和二十一年五月

池澤丈雄^⑤

決して名文というわけではないが、有名な「読書子に寄す——岩波文庫発刊に際して」(一九二七年七月)、「角川文庫発刊の辞」(一九四九年五月)といった試みにも通じる、意欲的な宣言だろう。そして「読書子に寄す——岩波文庫発刊に際して」においては「近時大量生産豫約出版の流行を見る」として当時

流行していた円本への対抗を意識していたように、この文中でも「事業的野心」と「よい本をつくる」ことが対置され、戦後の混乱期における出版の粗製乱造といった時代状況に対抗する、出版社の良心を前面に打ち出そうとする意識がよみとれる。

さてこのようにして出発した文潮社だが、その刊行圖書のラインナップを確認しておきたい。まず最初の三冊は

山本有三『風』一九四六年九月五日

三増英夫『混沌の記』一九四六年一月一日
舟橋聖一『男』一九四六年二月一日

で、山本有三は伝手を頼つて関係を持つことができたが、三増英夫は池澤が編集長だった時期に雑誌『創造』に連載されていた戦争暴露ものを書いた著者である。舟橋聖一も『創造』に創作を寄せているので、その時に関係ができたものと思われる。そして山本有三の『風』を筆頭に、名作現代文学というシリーズを出していく。実際の通し番号にはやや混乱があるが、次の八冊である。

名作現代文学(一九四六年九月～四七年一月)

山本有三『風』一九四六年九月五日

舟橋聖一『男』一九四六年二月一日

芹沢光治良『巴里に死す』一九四七年一月一日

谷崎潤一郎『愛すればこそ』一九四七年四月一〇日

菊池寛『慈悲心鳥』一九四七年四月一五日

宇野浩二『恋愛合戦』一九四七年八月一日

久米正雄『晴雲』一九四七年一〇月一五日

室生犀星『性に目覚める頃』一九四七年一月二〇日

先の刊行の辞にあった「名作文学の復元」といった言葉に沿うかのような、大正文学の大家たちが並ぶラインナップになっている。これと並行して「名作大衆文学」という、結果的に一作のみになったシリーズを出す。

名作大衆文学（一九四七年六月～四八年五月）

白井喬二『富士に立つ影』全十巻（一九四七年六月二〇日～四八年五月一日）

白井喬二は池澤とは戦前からの付き合いで、池沢の『創作と随筆』にも序文を寄せており、またのちに文潮社が倒産してからも、印税の債務放棄をするなど、池澤とは深い関係だった。さらに並行して刊行されたのが、次のような「文潮選書」という企画である。

文潮選書（一九四七年一〇月～一九四八年六月）

菊池寛『啓吉物語』一九四七年一〇月一日

正宗白鳥『地獄』一九四七年一月一日

室生犀星『あにいもうと』一九四七年二月一日

宇野浩二『蔵の中』一九四七年二月二五日

谷崎潤一郎『悪魔』一九四八年四月一日

上司小剣『木像』一九四八年六月一五日

この企画については、本の巻末に一九四七年七月付の「文潮選書の刊行について」という刊行の辞が掲載されているほか、文庫サイズながら、著者の近影と直筆署名が入り、巻末には解説をつけるという手の込んだ作りで、全部で六冊刊行された。さらに田中英光、豊田三郎など、先の「名作現代文学」に収録された作家よりも新しい作家を取り上げた「昭和文学選」というシリーズも刊行される。

昭和新文学選（一九四八年三月～一〇月）

丹羽文雄『毒』一九四八年三月一五日

豊田三郎『仮面天使』一九四八年八月一日

水上勉『フライパンの歌』一九四八年七月一五日

船山馨『落日の手記』一九四八年九月一日

水上勉『風部落』一九四八年九月一日

豊田三郎『処女咲笑』一九四八年一〇月一五日

田中英光『暗黒天使と小悪魔』一九四八年一〇月三一日

また「自叙伝全集」というシリーズは、各作家の自伝的な文章を集めた本に、写真と年譜、著作目録をつけたものもある、豪華本とうたった函入りの本となっている。

自叙伝全集（一九四八年四月―一九四九年六月）

『自叙伝全集 正宗白鳥』一九四八年四月一五日

『自叙伝全集 菊池寛』一九四八年六月一五日

『自叙伝全集 太宰治』一九四八年一〇月一〇日

『自叙伝全集 高浜虚子』一九四八年一二月三一日

『自叙伝全集 室生犀星』一九四九年六月一日

これらのほかに、確認できる文潮社の最後の刊行物も「文潮児童選書」という形で出ている。

文潮児童選書

楠山正雄『イワンの馬鹿』一九四九年八月一日

これ以外にも刊行した本はあり、確認できただけで書籍は全部で六〇点、雑誌が『季刊 文潮』一号―三号、『大衆文潮』一号―三号の六冊を刊行しており、かなり企画力のある多彩なラインナップを打ち出していた出版社といつて良い。そしてこうした多彩な文学ラインナップの他に、文潮社が注目されたのは、その広告宣伝にあった。華々しい宣伝については、池澤目

身、次のように自負している。

私の社の宣伝振りが華美だとか、相当派手にやつているなどと、一と頃、あちらこちらから云われたが、私は、他人から云われる迄そうは気が付かなかった。丁度よい潮時に他人からそう云われたので、まだ／＼足りないと思つていた所へ、程よいコントロールを受けたようなものである。

評判になる広告宣伝については『文豪のおこり』にも当時の看板や中吊り広告の写真などが掲載されており、その様子をうかがい知ることができるが、興味深いのは宇野浩二が池澤に宛てたはがきである。

僕の『フライパンの唄』の序文を、激賞といふことばをつけて、シンブン、ひどいのはタテカンバンに書いていますので あふ人ごとにナンとかかとかいはいれ、手紙やハガキで質問のやうなものをうけます。

あれはどうか中止して下さいませんか。

センデンは（ヨケイなことですが）大衆文学だけになさいましたら、どうですか。

このハガキの記述内容を裏付けるように、水上勉自身も後年、『フライパンの唄』の立看板があちこちにあつて、それを和田

芳恵にからかわれたと回想している。⁽¹⁰⁾

こうした存在感を示していた文潮社の本は当時の読者にも一定の支持を受けていたようだ。毎日新聞社が行った第一回出版世論調査の結果では、「良い書籍」の項目の女子の部で『巴里に死す』が「三位となっており、池澤自身は、「友人の誰彼が「大したものぢやないか」と云つて呉れたが、私は当り前の様な顔をしてゐた。しかし、内心では嬉しかった事を序ながら報告をして置く」とその心の裡を明かしている。

また後の『出版ニュース』での戦後十五年の回想座談会でも、新生社、鎌倉文庫と並んで印象に残る出版社として名前が上がるのが文潮社であり、華々しい活動をした戦後出版社としての印象を残していた。実際に出版点数だけ見ても、文潮社が四六年から四八年にかけて刊行した書籍四九点という数は、戦後に出版して現在も残る角川書店や、実質的に戦後に本格的な出版活動をした筑摩書房など同種の文学出版社と比較して、けっしてひけを取らない活動をしていた。

ただ、特徴的なのは、他の多くの出版社は、たとえば筑摩書房なら『展望』、角川書店なら『四季』のように、雑誌をまず創刊して、その後書籍を刊行する行き方を取り（鎌倉文庫は『人間』を、新生社は『新生』を創刊）、自社の雑誌に掲載した作品を、後に単行本として刊行することによって、書籍のコンテンツを確保していたわけだが、文潮社はそうした出版ではなく、書籍出版からはじめて、後に雑誌を創刊する形をとっている。

『季刊 文潮』は、水上勉のアイデアで、誌面の紙型をそのまま単行本に利用できるようにB6判にしたのだという（四一頁）。第二号からはA5判に変わり、必ずしも方針が徹底されていたわけではないものの、これも書籍のコンテンツを維持するための措置だったともいえる。

四、雑誌創刊と失敗

順調に見えた文潮社の歩みだが、一九四八年後半には他の戦後出版社と同じように危機を迎えることになる。一つは、『文豪のおごり』の記述を借りれば「憎むべき反乱事件」という、社員によるクーデターが起こったことで、もう一つ打撃を受けたのは、日配、日本出版配給株式会社が閉鎖機関に指定されたことである。最終的には一九四九年三月二十九日に活動を停止した日配だが、その閉鎖が予告されると、多くの出版社が資金繰りで影響を被り、文潮社も同様の打撃を受けた。

この状況を打開すべく企画されたのが、大衆文学雑誌の創刊だった。折しも「婦人雑誌ラッシュのあとをうけて、その頃は娯楽雑誌『平凡』、中間雑誌として『小説新潮』などの創刊が相ついでいた（二〇一頁）」ことから、その波に乗ることを考えたのだった。

『大衆文潮』と題され、目次に吉川英治、菊田一夫、山手樹一郎、長谷川伸、白井喬一、濱本浩、野村胡堂、山岡荘八といった名前を並べたこの娯楽雑誌は、当時の広告をみても大々的に

宣伝されている。編集費も相当かかり、部数も七万部を出したという、社運を賭けたこの雑誌は一九四九年一月に刊行された。だが結果的には大量の返本が発生し、失敗に終わる。池澤自身は、新雑誌ブームが過ぎていたことなどいくつかの理由を分析しているが、大家の作品を並べた誌面の内容において新味に欠けた印象は否めない。

こうした状況の中、印税の払いも滞り、在庫をゾッキに出した事で書店の信用を失い、高利の金を借りて首がまわらなくなるなど、転がるように状況が悪化する。差押えを受けるなどし、これまで毎月刊行していた刊行のサイクルは一九四九年六月まででストップし、八月一日刊行のものが最後になる。翌年八月二日の『出版ニュース』には「風、富士に立つ影等の出版で売り出し、その後不況で出版を中止した文潮社々長池澤丈雄氏は目下病床にあり憂慮されている」という記述がある。そして翌年には死亡記事まで出る。

元文潮社々長池澤丈雄氏は二月十六日死去した。同社は戦後創立。風々々巴里に死す等文藝図書の刊行につとめたが昨年経営難で廃業していた。¹⁶⁾

これが『文豪のおごり』の中にある「生きていた幽霊」という章題の意味なのだが、『文豪のおごり』の記述に戻ると、実際に同じ頃、池澤は娘が結核となったばかりか、自身も健康を

害し結核の診断を受けていた。体調も思わしくない池澤はここで状況を打開するある一つの夢を抱いていた。その一つは『大衆文潮』第二号の刊行だった。

『大衆文潮』をもう一度やれないだろうか？（略）

『大衆文潮』の第二号の分の原稿を八割方あつめたのを漫画社にあずけてあることはさきにも書いたが、これをそのままロスにするのは惜しいのだ。漫画社は、創刊号の印刷代金を完済してくれなければ次号は引き受けないというのだが、紙さえ入れれば何とかしてくれるような気がした。（略）

『大衆文潮』第二号は、創刊号よりも内容をかなりエロチックに盛り上げたおぼえがある。今のポルノとはくらべものにならないが、それでも私が、これは、とためらったほどの大胆なヌードのグラビヤで巻頭を埋めたのだ。編集はやはり南條三郎氏であったような気がする。

苦心をしただけに、これなら売れるという自信もあつて、何とかして今一度雑誌を出したかった。（一五七―一五八頁）

原稿はすべて入れた。しかしお金がなくて二号は印刷してもらえなかったという。だが実際には『大衆文潮』は六月に二号、八月に三号と、すでに刊行されているのだ。

このあたりから、『文豪のおごり』という書物は、戦後文壇



『大衆文潮』 2号



『大衆文潮』 3号

の証言といった記録的要素が背景に退き、失意の池澤の心象を反映した小説風な記述へとシフトしていく。「これまで私は何をして来たのか？」と自問し、自身の過去の活躍を走馬灯のように思い出しながら、『大衆文潮』二号さえ出せば状況を打開できると願い、雑誌刊行は一つの夢として語られる。だがその夢は、池澤が咯血し最悪の病状になったことにより、打ち碎かれる。

日配の出版広報誌で「新興出版社の旗手」と書きたてられたりもした。

「文潮社のものは売切り買切りで行くから、山本有三氏の『風』は五万部再版するように」

鍛冶氏からそう云われて、三万部を苦勞して刷り上げた。「すごいじゃないか、一体どうやって紙を手に入れたのだ？」

そのときはさすがに鍛冶氏もおどろいていた。そんなこ

んなで、誰の目にもその頃の文潮社は新興出版社の中でも出色に見えたのかもしれない。

いずくんぞ知らん、私はそれらの人びとの称賛に、有頂天でおどっていた道化にすぎなかっただけである。

しかも、私がそれに気付いたときは、すでに再起不能に近いまでに落ちこんでいた。

最後の切札であった（略）『大衆文潮』第二集の原稿も、印刷所の都合でオクラにされている。その上に私の結核の発病である。悪いことは手をつないでやってくる、と云われた通りである。（二七一頁）

入院の日、介助されながら寝台自動車に乗り込んだ池澤は、その車がまるで黒塗りの霊柩車のようだったことを思い出しながら「柩車のごとき寝台自動車に横たわり世を捨てし身を今はなげかず」と歌を詠む。この後の『文豪のおごり』は、『大衆文潮』第二号を刊行できれば事態は打開できると夢想しつつ、病床から詠む自らの短歌と、病床に届く妻との手紙のやり取りを軸に、あたかも小説のように展開していくことになる。

しかし、先述の通り、すでにこの時点で『大衆文潮』は三号まで刊行されている。彼にとつて、雑誌刊行は残された最後の事業として夢想されていたのだった。

五、池澤丈雄から池澤伸介へ

新潮社が危機に陥った時のことを回想して、池澤は『文豪のおぼり』で次のように述べている。

私は、出版そのものが投機性が多分にあると思っている。学術参考書や専門書は別として、それ以外の一般図書は出版してみなければわからない。出してみても危ぶんでいたものがベスト・セラーになり、そのままロング・セラーになるケースもある。それが出版の姿であり、そこに仕事のおもしろさがある。返本をおそれては仕事は出来ない。

(一二二頁)

出版は投機であり、そのためには返本も辞さずに行う必要を池澤は説く。だが、それは、「出版といふ仕事を単に事業の野心だけで行ふ事は、私共が最も忌みきらふことであつてよい本をつくるといふ事が全目的でなくてはなりません」と「新潮社の出版について」で書いた一九四六年五月の池澤丈雄の姿を裏切るものだろう。また「私は、何とかして一冊も返本されないようなすばらしい本を出したい、とそのとき思つたものである」と感じたという一九四二年の池澤丈雄の姿も裏切っている。事業として雑誌刊行を考えるに至るこの時の池澤の頭にあつたのは、もしかすると、「十何年前に、私が大阪で出した第一次「文

潮」は発行部数も二千部で廿五銭の同人雑誌だった」という一九三七年頃の同人雑誌時代だったのかもしれない。二〇〇〇部というのは、当時の同人雑誌の発行部数が五〇〇〇部というのが相場だったことを考えれば相当多い数字である。

だが雑誌刊行は果たして本当に局面を開けるほどの事業だったのだろうか。現実には厳しいものだったといわざるを得ない。昭和一二年と昭和二四年の物価上昇状況を分析した書物によれば、

以上によつて雑誌生産費の上昇率を求めれば、雑誌一般の製作費構成要素比率、すなわち、編集費一〇%、用紙費一五%、印刷・製本費二〇%、宣伝費一〇%、業務費一〇%、計六五%のうち、上昇率不明の編集費、製本費、業務費を除いた残余の各経費について、それら経費の比率と前記各上昇率によつて総合比率を算出すると四七七倍という数字が出て来る。これを前記の定価上昇率(イ)と(ロ)の平均四四六倍に比較しても、製作費上昇率の方が定価上昇率を上廻つており、雑誌製作における利潤の低下と企業経営の困難とを知り得るのである。

となつてゐる。同人誌時代のイメージで雑誌を刊行することは厳しい状況だったのであり、池澤が考えていたような雑誌刊行によつて事態を開拓することは困難であつた。

結局文潮社は事業を続けることは出来なかった。池澤自身は肺の成形手術が成功して健康を回復し、債権者との裁判にも勝訴したものの、家屋の差し押さえは取り消されることはないままだった。すべてを失い、社会復帰をめざす池澤が再会したのが水上勉だった。

私が水上勉さんに会ったのはそんなときである。当時、勉さんが神田の茜書房にいと誰からか聞いて、私から呼び出したのである。勉さんは銀座服部裏の名は忘れたが大きなレストランを指定して、そこで九年ぶりに私たちは再会した。勉さんは茜書房にはもういないこと、その頃は洋服地のセールスをしていることなどを私に話して、さらにそこを出て、勉さんの行きつけらしい新橋の焼鳥屋の二階に私を連れて行ってくれた。(二二七―二二八頁)

ここで水上は熱っぽく洋服のセールスでの詐欺事件のこと、トラック部隊のことを話し、それを本にするのだと語っていたのだという。それはまさに水上の再デビュー作「霧と影」の構想にほかならず、奇しくも「霧と影」の誕生の一端に立ち会っていたことになる。おそらく一九五八年から五九年にかけてのことだろう。一方で、池澤にもこれは良い再会となった。

水上さんからそのときF社という娯楽雑誌社をおしえられ

て、そこへはじめて原稿を持ち込み、採用になってそれから私の娯楽雑誌執筆がはじまったのだが、このF社のことはそのときまで私は知らなかった。入院中に患者の間で回し読みされていた巻頭に官能的なカラーの口絵のついた雑誌のことは知っていたが、それがF社の雑誌であることは知らなかったわけである。(二二八頁)

水上に「F社」すなわち双葉社を紹介されて、原稿をもちこみ採用となり、誕生したのが大衆娯楽作家の「池澤伸介」なのであった。この後、双葉社刊行の大衆娯楽雑誌を舞台に、大量の大衆小説を書き続けていくことになる。「池澤伸介」の足取りを現在跡づけているが、大衆娯楽雑誌に発表したということもあって、所蔵機関が少なく、また所蔵していても完全に揃っておらず、すべてを調査できていない。

現在確認できている池澤伸介としての一番早い著作は『読切雑誌』(二一卷九号、一九六〇年九月一日)に発表した「現代非情 馬鹿な女」だが、これ以降ほぼ毎月、双葉社が発行する大衆娯楽雑誌のどこかに作品を発表している。時に巻頭を飾り、表紙にも名前が掲載されるなど、双葉社の大衆娯楽雑誌に欠かせない作家として活躍していった。その活躍の実態は、一例として一九六一年に双葉社発行の『読切特撰集』に掲載された池澤伸介の作品名を挙げてみれば、おおよそ推測できるだろう。

『説切特撰集』

「愛慾病棟 青草の褥の秘密」 九卷一号、一九六一年一月

「時代好色 槍二筋」 九卷三号、一九六一年三月

「名城小説 妖かしの井戸」 九卷七号、一九六一年六月

「好色伝奇 江戸の狼」 九卷一〇号、一九六一年八月

「青春哀歌 湖畔の女」 九卷一三号、一九六一年一〇月

「時代艶色 野良猫銀四郎」 九卷一六号、一九六一年十二月

時代小説に官能的要素を交えたこれら大衆娯楽小説の多くは同工異曲で読み捨てのものだ。だが池澤が盛んに書きまくった作品の舞台となった大衆娯楽雑誌は、高度成長期に人々の娯楽として確実な地位を占める、必要欠くべからざるコンテンツとして存在していた。そこでは芸能ゴシップ、性とともに、広い意味での文学が提供されており、それを担った一人が池澤伸介だった。

池澤がいつまで活動していたかも完全には調査できてはいないが、双葉社のこれらの雑誌が一九七三年五月までにはすべて休刊になる、その最後の号まで書き続けていた。作品を継続的に見ていけば、雑誌の性格が変化して、より煽情的な性格を帯びると、それに合わせた形の小説を提供しているようでもある。こうした雑誌に精力的に書き続けた池澤の心中を推し量ることとはできない。^②『文豪のおごり』に、「私の倒産を踏み台にしたただ一人については三十余りを経た今も怒りは変わっていない

い」と文潮社の社員への怒りを隠そうとはせず、谷崎潤一郎についても、文潮社との間で起こったトラブルを「三十有余年立ったいまでもベンが震えるほど腹が立っている」と書き、それが『文豪のおごり』のタイトルにもなっているのだから、どこか屈折した思いを抱え続けていたのかもしれない。

途中一冊の時代小説の著書『うつる船伝奇』（一九六五年四月）を双葉社から出しているが、基本的には読み捨ての雑誌に池澤は書き続けた。時代が求め、人々が求めた雑誌に池澤は人生をかけたといつてよい。それは「一冊も返本されないようなすばらしい本」ではなかったかもしれないし、文潮社を作った時に考えていた「文学」ではなかったかもしれない。何よりこの私を持つ『文豪のおごり』自体、地に判が押されていることから分かるように、ゾッキに出された本だった。しかし、そのような形でも、池澤は自分の足跡を残し、読者に作品を届け続けた作家であった。出版人池澤丈雄^③作家池澤伸介、その没年は不明である。

* 本稿は昭和文学会第七二回研究集会（二〇二三年五月一日）、「特集 雑誌の「危機」と文学」で報告した「投機としての出版——戦後出版と文潮社——」を基にしています。会場内外での貴重なご教示に感謝いたします。

* 本研究はJSPS科研費 19K00283の助成を受けたものです。

注

- (1) この本と池澤伸介・池澤丈雄については、河原努「第四 生きていた幽霊 文潮社の池澤丈雄——人名事典で死んでいた人が生きていた話」(Webコラム「趣味の近代日本出版史」<https://www.libro-koseishaco.jp/webcolumn/shuppanshil/> 二〇二三年一月一日閲覧)も詳しく。
- (2) 池沢丈雄『創作と随筆』(笛同人会、一九三八年五月)
- (3) ただし、第一回、第二回の入選者の中に該当しそうな人物は、当時洲本中在学という住所を考慮してもいない。
- (4) 池沢丈雄「編輯後記」(『創造』一九四六年一月)
- (5) 池澤丈雄「文潮社の出版について」(山本有三『風』文潮社、一九四六年九月五日)。なお、舟橋聖一『男』以後、「昭和二十一年五月」は「昭和二十一年五月創業の日」となる。
- (6) この他に四頁立ての『文芸通信 文潮』があるが、確認できたものは、六号(一九四八年三月)、七号(一九四八年四月)、九号(一九四八年六月)のみである。
- (7) これらの企画を担っていたのが、若き日の水上勉だったことは池澤丈雄も述べ、水上勉自身も回想しており、よく知られている。水上のもとには、文潮選書の企画書、「企画課長」といった肩書きの文潮社時代の名刺などの資料が残る。なお文潮社の出版目録についてはどこかの機会に公開したい。
- (8) 池澤丈雄「宣伝瑣談」(『出版天国』一九四八年九月)
- (9) 宇野浩一 池澤丈雄宛はがき一九四八年八月三日消印
- (10) 水上勉『冬日の道』(中央公論社、一九七〇年)、「自伝抄 浦和にいた頃」(『読売新聞』一九七九年四月二四日夕刊)
- (11) 『どんな本が読まれるか』(毎日新聞社、一九四八年一月)
- (12) 池澤丈雄「抜き書き帖」(『文芸通信 文潮』一九四八年四月)
- (13) 「戦後出版社の興亡(匿名座談会)」(『出版ニュース』一九六〇年八月下旬号)
- (14) 角川書店は46年に7冊、47年に21冊、48年に34冊刊行(『角川書店図書目録』)、筑摩書房は46年に8冊、47年に11冊、48年に42冊刊行(『筑摩書房の三十年』)、新潮社は、46年に7冊、47年に28冊、48年に91冊刊行(『新潮社七十年』)、岩波書店は46年に69冊、47年に73冊、48年に84冊刊行している(『岩波書店の五十年』)。
- (15) 室生犀星の日記の一九四九年九月五日には、「文潮社の池澤社長から払ふ金がないから、本で半金五萬円を引取ってくれ」といひ、あと五萬は十一月から五千円づつ拂ふといつて来た。つひに予期のごとく十一萬の印税は一錢も支拂はずに、ここまで来たのである。」とあり、十一月三日に「文潮社の印税十一萬はつひに半年無駄足をつかひ、一文も支払はなかつた。止むを得ず文芸家協会に提訴取立を委嘱したが、それも一文にもならないだらう。」とある(『室生犀星全集』別巻第一 新潮社、一九六六年五月)。
- (16) 「出版界だより」(『出版ニュース』一九五一年三月一日)
- (17) 注(12)に同じ。
- (18) 杉田泰一「趣味の小文芸誌経営法」(研農社、一九三六年二月)、小林昌樹「文藝同人雑誌出版マニユアル―戦前版」(金沢文圃閣、

二〇一七年一月収録

(19) 永島寛一『雑誌企業の歴史と現状』（朝日新聞調査研究室報告、一九五一年三月）

(20) 一九六三年の段階で双葉社の広告に自社の九大娯楽雑誌として挙げられているのは、いずれもA5判の『傑作倶楽部』『小説の泉』『大衆小説』『読切特撰集』『読切雑誌』『読切傑作集』『読切時代小説』『剣豪列伝集』『別冊読切傑作集』である。

(21) 『読切雑誌』（二八巻七号、一九六七年七月）の「作家訪問」のコーナーに、池澤の近影と「ウルトラ晩成型」と題した短文が掲載されている。

（かけの・たけし／武蔵野大学教授）